

多文化サービス・ラーニング導入に関する予備的考察 —佐賀市三瀬村との連携・協働事例をもとに—

山田 直子¹

A Preliminary Study on Introduction of Multicultural Service Learning: A Case of Cooperation with Mitsuse Village in Saga

Naoko YAMADA,

要 旨

本研究は、2013年より実施してきたサービス・ラーニングの手法を用いた、留学生・日本人学生・地域住民による協働学習の実践を検証するものである。佐賀大学が実施するサマープログラムの一環として、協定校の学生および日本人学生に三瀬村住民との協働・交流の機会をこれまで3回提供してきた。この取り組みは、留学生と日本人学生が地域コミュニティに入り、住民とともに村内の維持管理作業や交流を行ない、その体験を通して地域について学び、学生自らが課題を検討することを促すものである。過去3年間の取り組みを中心に、多文化サービス・ラーニングの導入の経緯、地域コミュニティとの連携関係の構築を概観し、実施する上での課題を明らかにする。またサービス・ラーニングを通して留学生と日本人学生が何を学び、どのように咀嚼したのか、さらに地域住民は文化の異なる他者との協働から何を得たのか、どのように捉えられているのかについて振り返りアンケート、聞き取りの結果報告書、参加者対象のアンケート調査の結果をもとに考察する。

【キーワード】 サービス・ラーニング、地域連携・協働、留学生と日本人学生の共修

1. はじめに

本研究は、2013年より実施してきたサービス・ラーニングの教育手法を用いた、留学生・日本人学生・地域住民による協働学習の実践を検証するものである。サービス・ラーニングとは、1980年代以降アメリカにおいて市民性を涵養する学びとして導入されるようになった教育手法である。サービス・ラーニングには多様な解釈が存在しており、決まった定義がない²。ここでは、サービス・ラーニングの重要な要素である「サービス（奉仕活動）」と「ラーニング（学習）」のみに限定した定義、つまり「学生が地域のニーズに対応した活動に従事する中で学ぶ経験的学習」とする。

¹ 佐賀大学 国際交流推進センター

² サービス・ラーニングの歴史と定義については、中村(2010)、桜井(2007)、村上(2007)を参照。

藤田（2014）は、現在の日本の高等教育機関でみられる実用性や就職力偏重の教育を批判するとともに、自国中心主義的なグローバル人材育成の傾向を問題視し、公共社会の活性化の担い手となる市民教育の必要性を訴えている。また山脇（2008）は現場や地域に根ざしながら、グローバルな視野で公共的な問題を検討することの重要性を指摘し、「グローバルな市民教育」という理念へ改革することを提案している。またグローバルな市民教育を、「各自が生きる地域や現場を大切にしつつ、国民を超えたグローバルな問題を共に認識し考えさせるような教育理念」とし、文化や歴史の多様性を理解し、社会のありようを理解するための「共感」や「共苦」を涵養する教育を求めている。

2010年に日本学術会議が発表した『21世紀の教養と教養教育』の提言は、複雑化するグローバル社会の問題とローカルな社会が抱える課題のいずれにおいても「多様な取り組みに参加し協働する知性・智恵・実践的能力の形成」が求められるとし、学生がキャンパス内外で、また授業内外で、「人としての生き方、世界との関わり方、市民としての社会参加」を安全で豊かなものにする上で大学の役割が重要であるとしている（日本学術振興会2010）。

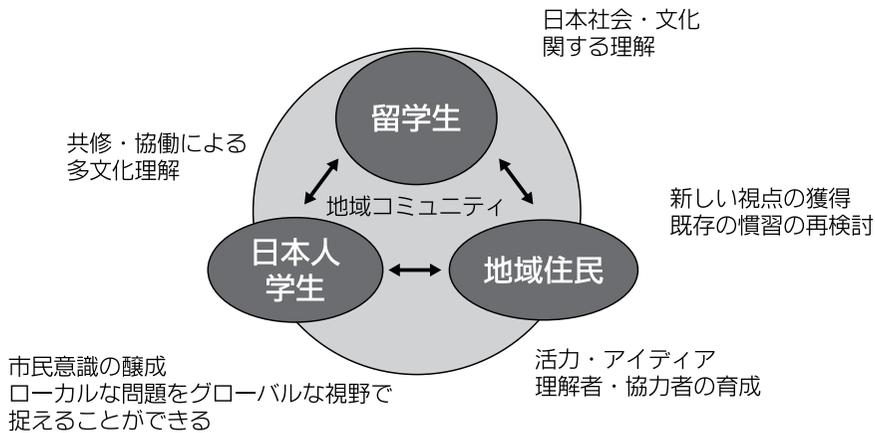
このような潮流の中で、近年日本の多くの大学ではこれまで行なってきた専門教育におけるフィールドでの調査や実習に加え、教養教育においても地域社会の中での体験学習や地域住民との協働学習を取り入れる授業が活発に進められるようになった。佐賀大学においても「地（知）の拠点整備事業」に採択され、地域再生・活性化に貢献する地域に根ざした大学をめざして、学生参画による地域と連携・協働した様々な教育活動が数多く展開されている。

2. 日本人学生・留学生・地域住民の協働から期待される成果

日本人学生と留学生が地域住民とともに言語や文化の違いを乗り越えながら学ぶサービス・ラーニングの構築をめざし、2013年度より地域連携の取り組みを開始した。2015年後期より筆者が担当するインターフェイス科目「異文化交流Ⅳ－野外手法を通じた地域社会の価値の再検討」において、留学生と日本人学生の共修授業を英語により行なうこと、またサービス・ラーニングの手法を用いることを念頭においていた。取り組みを行なうにあたり、日本人学生・留学生・地域コミュニティのそれぞれが得られる達成目標や成果を【図1】に示すように設定した。

留学生は日本の地域社会に血縁・地縁関係を持たない、あるいは繋がりが限られているため、キャンパス内の学習や活動だけでは日本社会あるいは地域についての知識や理解は表面的なものに留まってしまう可能性が高い。しかし一般の地域住民との人間関係を構築することは、留学生、特に短期の留学生にとってハードルが高い。留学生にとってサービス・ラーニングは、地域コミュニティに身を置き、人々の日々の営みを共有し、住民の行動や言動に直接触れる貴重な機会であり、それらの体験は日本の社会や文化、地域の現状を深く理解する手がかりとなる。

【図1】多文化サービス・ラーニングの達成目標と期待される成果



また日本人学生についても、自分が生活をしている地域について関心がなければ、又はそれを専門とする学問分野を専攻しなければ、学生時代に地域社会についての理解を深める機会は非常に限られている。地域社会の中で住民とともに行なう協働学習は、参加学生が地域の特質や現状を理解するだけでなく、地域が抱える課題が自らの生活にも直結していることに気づき、問題解決のための方法を積極的に考える機会を提供する。また日本人学生、留学生、地域住民の3者が協力して活動を行なう際、日本人学生は留学生と地域住民との橋渡し役を担うことを求められる。留学生・地域社会のそれぞれの文化や価値観を考慮しながら、与えられた情報を咀嚼し双方に伝えることが必要な場面が多く発生する。それにより地域や日本を相対的に見る力を養うこともねらいとしている。

最後に、地域社会や地域住民が大学との連携や学生との協働から得られる成果は何かという点である。本実践を通して学生が地域から学び、成長するだけでなく、地域住民にとって得るものがなければ継続は難しい。住民の多くが兼業農家であるか、又は定年退職後に専業農家になった方々が多く、過疎化する集落で農業を営むことが困難な状況になりつつある。協働の意義が共有され、活動から十分な成果が得られなければ、住民にとっては単なる公役の追加になってしまう危険性があり、地域活性化への貢献とはならない。一方で、活動の内容、運営のあり方を地域とともに検討し、実践することにより、学生による「サービス」が地域の維持管理の支援につながり、さらにはコミュニティの活性化のために積極的に参与したいと考える学生が育ち、村と村の外とをつなぐサポーターへと成長する可能性も高い³。

サービス・ラーニングを実践する上での重要な鍵が、地域コミュニティとの連携関係の

³ 五十嵐（2014）は少子高齢化が進む佐賀の農村部の将来を考える時、「交流を通して地域に貢献してくれる外部の存在が重要」と指摘している。

構築であることは言うまでもない。異なる期待をもつ大学と地域が、ともに利益を享受できる連携のあり方を模索した過程について以下に紹介する。

3. 地域コミュニティとの連携－佐賀市三瀬村の事例

2013年7月以降、留学生・日本人学生・地域住民の協働による多文化サービス・ラーニングに積極的に協力してくださったのが佐賀市三瀬村であった。三瀬村は、佐賀市中心部および福岡県からそれぞれ車で約1時間の距離にあり、温泉やキャンプ場、野菜の直売所、地元の食材を使った料理を提供するレストランなど、観光資源に恵まれており、都市住民が週末に余暇を楽しむ観光地として賑わっている。しかしながら、佐賀市が発表している校区別人口統計によると、三瀬校区の人口は平成19年10月時点で495世帯1,555人だったものが、8年後の平成27年10月には、496世帯1,354人まで減少している⁴。世帯数は変わらないものの、人口は8年間で201人の減少を示している。さらに三瀬村の高齢化率（人口に占める65歳以上の人の割合）は、平成7年に24.3%、平成13年に29.9%、平成25年に34.5%と急速に上昇している⁵。子供の数が減っているだけでなく、高校を卒業した若者が大学進学や就職等で三瀬村を離れる傾向にあることが要因であると考えられる。

これらのデータが示すとおり、三瀬村が(1)過疎化と高齢化が進行する中山間地区であること、(2)比較的、外部・他者に対して開放的な地域性を持っていると思われたこと、そして(3)大学から1時間以内で移動できるという3つの理由から、三瀬村との連携を希望した。2013年7月に第一回の活動を実施して以降、【表1】が示すように、インターフェイスクリニクスも含め、計11回の取り組みを行なった。

次節では、連携活動の主軸の一つであるサマープログラムにおける活動の展開を紹介する。

⁴ 佐賀市ホームページ『市の人口』平成19年～平成27年。 <https://www.city.saga.lg.jp/main/288.html>

⁵ 佐賀市『佐賀市高齢者健康福祉計画』3頁、佐賀中部広域連合 <http://www.chubu.saga.saga.jp/2%20jigyokeikaku/第3章.pdf> 28頁

【表1】三瀬村との連携活動

実施日	活動型	活動内容	学生の種類	学生数	地域参加者
2013年7月	サマープログラム	除草、野菜収穫、伝統食調理、川掃除	サマープログラム留学生・日本人学生	54名 (留学生32名)	1集落約15名
2014年4月	スポーツ交流	地区対抗ソフトバレーボール	サマープログラム参加予定の日本人学生	4名 (留学生なし)	4集落約30名
2014年7月	サマープログラム	除草、川掃除、神社仏閣の紹介、植栽	サマープログラム留学生・日本人学生	49名 (留学生30名)	4集落約40名
2014年11月	4集落合同植栽活動	植栽	留学生(交換・正規)・日本人学生	13名 (留学生9名)	4集落約30名
2015年2月	体験・交流	農家民宿体験(地元加工品や経営、みそ作り)	留学生(正規・交換)・日本人学生	9名 (留学生4名)	農家民宿、加工場8名
2015年4月	スポーツ交流	地区対抗グラウンドゴルフ	サマープログラム参加予定の日本人学生	10名 (留学生なし)	4集落約30名
2015年7月	サマープログラム (1泊2日)	草抜き、川掃除、まんじゅうづくり、植栽、懇親会	サマープログラム参加学生	20名 (留学生10名)	4集落約40名
2015年10月	ボランティア	村内のりんご園でりんごの袋はずし作業	留学生(正規)・日本人学生	18名 (留学生11名)	りんご園経営者家族5名
2015年10月	農作業・フィールドワーク(1泊2日) (インターフェイス)	紅芋掘り、加工品工場聞き取り、集落内の資源・課題探し	授業履修者・参加希望学生	14名 (留学生5名)	加工場・農家民宿・1集落計25名
2015年11月	産物販売・発信 (インターフェイス)	三瀬村の農産物・加工品を大学祭で販売、消費者に産品と三瀬村の紹介	授業履修者・参加希望学生	14名 (留学生5名)	加工場・農家民宿10名
2015年11月	4集落合同植栽活動 成果発表 (インターフェイス)	植栽活動・学生による成果報告会と地域づくりのアイデア発表	授業履修者・参加希望学生	14名 (留学生5名)	4集落約30名

4. サマープログラムにおける地域連携活動

海外協定校等に所属する留学生と佐賀大学の学生を対象としたサマープログラムの一環として行なった三瀬村との連携活動を事例に、地域コミュニティとの関係構築と連携のあり方、運営上の課題について述べたい。

2011年10月に佐賀大学は国際交流推進センターを設置した。佐賀大学の国際化戦略の中で掲げられた「サマー国際キャンパス」の取り組みの一つとして、2013年度より佐賀大学サマープログラム(Saga University Summer Program, 以下SUSPとする)と佐賀大学香港中文大学学生交流プログラムを全学教育機構および各学部・研究科の協力を得て開始した⁶。SUSPの目的は、佐賀大学の特色ある教育と研究を協定校の学生に体験してもらい、優秀な留学生を交換留学プログラムや大学院進学へと誘引すること、また協定校との連携強化をはかることとしている。プログラムは英語で実施され、世界各地の協定校から毎年約20人の留学生を3週間、香港中文大学の学生10名を10日間受け入れている。

SUSPは“Creating Innovation for Sustainability in Young Leaders”というテーマを掲げ、環境、

⁶ 香港中文大学との学生交流プログラムは、佐賀大学生の香港派遣と先方の学生の受け入れがセットになった双方型交流プログラムで、日本研究を専攻する香港の学生を毎年10名受け入れている。主担当は全学教育機構の吉川達講師。

農業、エネルギー等に関連する授業、視察、体験、交流の機会を提供している。プログラムを通して持続可能な社会の実現のために若者が何をすべきか、できるのかについて、異なる国の学生同士が共に考え、答えを模索することを求めている。本プログラムが提供する教育コンテンツは、佐賀におけるゴミ処理の技術やシステム、クリーンエネルギーの最先端技術を生み出す研究所や企業訪問、循環型農業の実践、日本の伝統的な麴の文化や技術、その継承、里山の森林保全や生物多様性に関する学習というように、学際的に持続可能性な社会について現場で学び考えることを重視して構築されている。

三瀬村での活動は、参加学生が地域の住民との協働・交流を通して、佐賀の農業や地域社会を事例に、持続可能なコミュニティのあり方を模索することが期待された。過去3回のいずれも三瀬村で受け入れをさせていただいており、2013年度と2014年度は半日、2015年度は1泊2日の活動となった。2013年度のサマープログラムでは、留学生32人（協定校の学生22人、香港中文大学生10人）と佐賀大学生20人（うち2人が佐賀大学所属の留学生）であった。作業に入る前に、全員が公民館に集合し、地域代表者から村の概況、地域の年中行事、食文化に関する講義を受けた。また集落支援員からも三瀬村の資源とコミュニティについて解説が行なわれた。約30分間の講義と質疑応答により基本的な知識を獲得した後、作業の意味や手順の説明を受け住民による指導や支援を受けながら、水田の除草作業、川掃除、野菜の収穫、伝統食の調理を地域住民とともに行なった。また作業後の懇親会では地域の食材を使った料理を楽しみながら、地域の方々と意見交換をした。昼食後は、地区内の神社や祠などを見学し、土地に伝わる言い伝えや年中行事に関する話を地域住民から直接聞いた。

グループ	A	B	C
学生数	20	20	10
9:15	三瀬村到着		
9:30-10:15	三瀬村についてのレクチャー 集落支援員の活動について 作業の説明		
10:15-12:00	水田での雑草とりについて説明		野菜収穫 調理
	河川清掃	水田草取り	
12:00-13:30	昼食 食材・伝統食・祭事の料理について解説 かたづけ		
13:30-14:30	神社・祠をまわる 村の祭事と歴史について		
14:30-15:00	まとめ・あいさつ		
15:00	出発		

【表2】SUSP 2013での三瀬村における活動



【写真1】作業開始前に三瀬村についての講義を受講

多くの学生が農作業に従事することで、少しでも地域の助けになることを期待したが、約50名の学生に農作業の機会を提供するには、非常に多くの時間と労力を住民に求めるものとなってしまった。また地域住民の間にも学生にきつい思い出だけを持って帰って欲しくない、楽しんでもらいたいという思いがあり、「体験」の域を超えていなかった。この経験から、サービス・ラーニングの「サービス」を充分なものにするためには、学生をゲストとして扱わないこと、つまり準備から片付けまで全行程に参加させることを反省会で確認した。一方で、自治会からは、この取り組みを通して大勢の人数を誘導したり、限られた時間内に公民館で大人数の食事の支度をするなど、災害時対応の訓練になったとの意見も出された。

2回目となる2014年のサマープログラムでは、三瀬村より鳴瀬川流域の4集落合同で受け入れを行なってはどうかという提案が出された。この背景には、将来的に各集落は単独でコミュニティを存立させることが困難になることが予測されるため、共同で様々な活動を実施することにより、集落間の連携を強化したいという期待があったと理解している。これにより、2014年度は約50人の学生を4つの地区に配置することが可能となり、1地区あたり12名程度の学生を受け入れていただいた。活動内容は各集落の特色や事情に応じて異なり、ブルーベリー園やゲートボール場での除草作業、神社の掃除、川掃除、植栽活動などを行なった。作業後の懇親会は各地区の公民館でおこなわれ、作業を通して親交を深めた地域住民と、地域の農産物や加工品を食べながら交流を行なった。前年度の反省から、「体験からサービス」をより意識して活動を行なった。午前と午後それぞれ2時間の作業時間を設定した。しかし、地区によっては作業をするのではなく、集落内を散策しながら土地の歴史や習慣についての解説を行なったり、懇親会をするなど各地区の状況にあわせて対応していただいた。前年度に行なった現地での講義は、村での活動の数日前に集落支援員が大学に訪問し行なった。



【写真2】 SUSP 2014川の清掃



【写真3】 SUSP 2014地域住民との交流

2014年度は4地区合同で実施することになり、活動が自治会の行事として位置づけられることになった。それにより準備や当日の作業は自治会長の呼びかけで有志が集められ、その方々を中心に行なわれることになった。地区によっては参加住民の呼びかけに苦勞をしている事例もあった。とりわけ外部団体の受け入れや連携の経験が豊富ではない地区では自治会長の負担が過大となった。2014年度終了時には、4地区合同での実施は自治会長にかかる負担が大きいことが問題視されていたものの、2015年度も引き続き4地区で受け入れを行なう方針が提示された。各地区の負担を軽減するための対策として、基準を定めてそれに合わせるのではなく、あくまでも各地区の可能な範囲で柔軟に対応することとした。また受け入れ学生数を50名から20名へと縮小した。各地区で行なう作業内容は、これまでのように農作業に限定せず、状況に応じたものに自由に計画された。公民館の障子の張り替えや、女性グループが経営する食品加工場で生産されているお饅頭を地域の方々と一緒につくるなど、活動が多様化した。一方で「学生にもっとゆっくり三瀬をみてもらいたい」「交流する時間が少なかった」という地域の声を受けて、公民館に一晩滞在する1泊2日の活動となった。

ここで大学と地域コミュニティとの連携をウィン・ウィンの取り組みにするために克服すべき課題を「連携」の観点から述べたい。第一に、受け入れ側がNPO団体のような組織でない場合、又は何らかのコーディネート組織が存在しない場合、大学と地域の連携・協働は容易ではないということである。とりわけ人材に乏しい中山間地域においては、自治会役員や有志の方々に依存するケースが多い。本取り組みでは自治会リーダーとともに、重要な役割を担っていただいたのが、地域の集落支援員である。三瀬村まで片道約1時間と物理的に離れているため、担当教員は打合わせのために頻繁に訪問することができず、調整作業のほとんどを集落支援員にお願いすることになってしまった。集落支援員は三瀬村と大学の間の間に立って双方の要望を擦り合わせる非常に重要なコーディネート役を担っていただいた。集落支援員にかかるこれらの負担も軽視できない。取り組み回数が増え、互いに経験値を上げて、双方ともに協働を通して得たい成果、期待していることを毎回確認し合い、広く共有することが求められる。その意味で、連携のあり方は常に精査する必要があると考える。

5. 地域の中での協働活動が学生にもたらすもの

次に2014年度の活動終了後に行なった参加学生の振り返りシートの記述をもとに、地域住民と共に活動をすることで留学生と日本人学生はそれぞれどのような発見・学びを得たのかを検証する。振り返りシートは、教育的効果を測定することを目的とするものではなく、地域の方々に学生らが感じたことをフィードバックすること、連携の改善をはかるための材料とすることを目的として行なった。質問は以下の4項目である。振り返りシートは留学生27名、日本人学生14名から提出された。

Q 1. 今日の体験交流で楽しかったこと・良かったことは？

What was your favorite part of today's activities?

Q 2. 今回感じた地域の魅力・興味深いところを書き出してみてください。

Please let us know about attractive points of local communities and things that interest you from today's activities.

Q 3. 三瀬の持続可能性の素は何か見つかりましたか？

Did you find out the key or elements to sustainability in Mitsuse?

Q 4. 学生と地域の繋がり方・連携について何か提案はありますか？

または、どんな繋がり方がしてみたいですか？

Please let us know if you have any ideas and suggestions for involving students to cooperate with local communities. As a student, what kind of activities would you like to participate that could connect you and local communities?

5.1 留学生

地域との協働から留学生が何を学んだのか、どのように感じ、理解したのかを振り返りアンケートの記述から抽出してみたい。2014年度は参加した留学生の多くが日本語をまったく理解しない、あるいはほとんど理解できなかった。地域住民との言語によるコミュニケーションは日本人学生に依存しなければならなかった⁷。しかし、「活動の中で良かったこと」「三瀬村について興味をもったこと、魅力があると思われること」に関する記述において、27人中23人が一般の日本人との密な交流や意見交換ができたことを高く評価している。特に「人々のあたたかさ (friendly, hospitality)」を実感したことが良かったと感じている。留学生と地域住民との間で、非言語によるコミュニケーションが活発に行なわれていたこと、また日本人学生も留学生と地域住民の間の橋渡し役として主体的に関与することができたのではないかと考えられる。

次に、プログラムを通して留学生が何を学び、どのように理解したのかについて、「三瀬の持続可能性の素」に関する記述から考察する。半日の活動の中心が農業や集落の維持管理に関わる作業であり、またアンケートの質問が持続可能性に限定したものであったので偏りがあるが、留学生は協働や交流を通して三瀬の人々の自然との関わり方について多くを学んでいることがわかる。顕著な傾向としてあげられるのは、多くの留学生が三瀬の人々の自然に対する畏敬の念、自然との共存に関して述べている点である。これは、後ほど議論する日本人学生の記述とは異なっている。さらに、留学生は人々の生活が自己充足的 (self-sufficient) で、モノや資源を大切にしている精神を感じ、それらが持続可能性の素であると解釈している。さらに自国の農村社会と比較しながら、「農村は貧し

⁷ 回収された27人の振り返りアンケートの中で、日本語で作文ができた留学生は4人であった。

い」というイメージが日本に来て変化したと述べる学生もいた。以下に学生の記述をいくつか紹介する。

「村の人々は自然に依存して生活している。だからこそ三瀬の人々は責任感をもって環境を持続可能なものにするために維持管理をしようとしている。」(香港出身)

「人々が資源を機能的に活用しているのがわかった。人口は少ないけれど、自分たちの食料や資源は十分に自給自足ができていたように感じた。」(スリランカ出身)

「(懇親会の後) ごはんがたくさん余っても、それを捨てるのではなく、おにぎりにして翌日のために残しておいた。何も無駄にしない姿勢が素晴らしい。」(タイ出身)

「人々の日常生活の中に、持続可能性の素を見つけた。野菜を全部食べきれない場合は、漬け物にするらしい。」(タイ出身)

「三瀬は山の中にあるにも関わらず、村の人々のGDP(暮らし)は豊かで、日本の他の村と同じように発展している。そして村の人たちは森や水、環境などすべてをきちんと管理している。」(カンボジア出身)

「三瀬の人々の生き方はシンプルで地に足がついている。そんなふうに私は思った。本当に重要なのは人々がとても幸せそうだということ。村の皆さんは自分に与えられたものや現在の生活に満足をしているように思えた。」(タイ出身)

半日の活動であり、活動や交流の際に言語能力上の難しさはあったと思うが、留学生はコミュニティのあり方や人々の生活を観察し、話を聞き、咀嚼しようとしている姿が見て取れる。この経験から得られた知識や知見は、留学生の日本理解を多面的なものにすると同時に、三瀬村という限定された事例ではあるものの、より具体性のあるものへと変化しただと考えられる。

5.2 日本人学生

振り返りアンケートでは、留学生と同様でまず、「体験で楽しかったこと・良かったこと」を問うている。これに対し日本人学生の半数以上(14人中8人)が「地元の方々と〇〇ができたこと」という表現を使用しており、日頃の学生生活で接触する機会のない地域住民との協働と交流から充実感を得ている姿が確認できる。中には、どのように親切にし

でもらったのか、また自分が行なった作業に対して地域の人々がどのように感謝を伝えてくれたのかを具体的に述べる記述もあり、地域住民の反応が学生たちに強く印象づけられていることがわかる。

次に、「地域の魅力・興味深いところ」に関する記述では、多くの学生がコミュニティ内の人々の繋がりや相互扶助（9人）、豊かな自然と環境（8人）、人々のあたたかさ・寛容性（6人）をあげている。以下に複数の学生の声を紹介する。

「地域の方々同士の繋がりが強く、まるで親戚の集まりのような暖かさを感じました。また水や空気が澄んでいて、住みやすい環境だと思いました。」（2年生）

「自然と地域の人々が共に生活している点。何よりも自分が住む地域を知り、大事にしている点。近所や同じ地域の人々との交流を大切にしている点。空気と水と自然がきれいな点。」（3年生）

「最近、人と人との繋がりが薄くなっているけど、まだまだ強い繋がりが残っている三瀬は魅力的だと思った。」（3年生）

「小さな集落で住んでいる人たちも少ないが、村の方々はみんな生き生きとしていた。また佐賀大学以外にもフランスのある町と友好関係があり、フランスの街並を模した施設をつくるなど、外部の人の受け入れが寛容だと感じた。」（4年生）

「地域住民同士の結びつきが強く、何事も協力している。地元で取れた食材を多く使用した、安心でおいしい料理が食べられる。自分たちでできることは業者に頼まずに、地域でおこなう。」（4年生）

次に三瀬村の中に「持続可能性の素」を見つけられたかを問う質問に対しては、地域住民との対話や五感を使って地域を観察し、感じたことを素直に描写している。三瀬村が持続できている理由、あるいは将来も持続していくための鍵を学生なりに考えた形跡が以下の記述に表出している。

「皆さんの仲が良く、誰が今どんな状態なのかを情報交換しているため、何かがあった時にすぐに駆けつけられる、手伝えることができる関係を築けていることが持続可能性の素ではないかと思いました。また環境に配慮した農業も行なっており、そのことを誇りに思っていることは農業や環境の持続可能性に繋がると思いました。」（3年生）

「オーガニックの野菜など、これからの社会で重視されるような作物を作っているとお聞きしたので、そこに持続可能性の素があると感じた。」（3年生）

「「人」がいること、仕事を受け継いでいくことだと思います。」（2年生）

「住民が明るい。新しい農業を取り入れて意欲的である。他の国の人も臆せず日本語でどんだん話をし、普通に接する。」（2年生）

「三瀬の持続可能性の素は、常に自然と人が循環しているということだと思います。自然の豊かさを上手に利用して、共に生きていると思いました。」（2年生）

「（住民が）自分たちが住む三瀬村のこれまでを知り、これからを村ぐるみで考えることで村を愛することができる。このことを大切にしている地域の方々との「助け合い」をしていくことがこれからの持続に必要であり大切だと感じた。（下線は筆者）」（3年生）

「三瀬には、人を惹き付けるような魅力的なもの、例えば初夏には蛍が飛び、夏には入って遊べるようなきれいな川、とれたてで新鮮なおいしい作物、そばや鶏、自然豊かな景観などがあります。これらをもっと地域外の人に広めて、地域を訪れる人を増やしたり、住んでみたいと考える人を増やしたりできないだろうかと感じました。（下線は筆者）」（4年生）

最後に、この取り組みによる地域住民との協働が、市民意識の醸成につなげることができたのかについて考察したい。まず、先に紹介した学生の記述の中にいくつか映し出されていると思われる（上記下線部）。どのようにすれば三瀬村が将来的にも持続することが可能かを自ら考え意見を述べている。次に振り返りアンケートの4つ目の質問項目「学生と地域の繋がり方・連携についての提案」に関する記述を見てみたい。学生から多くの具体的な提案が出されている。学生が地域の中で楽しむ活動を提案するというよりも、むしろどのようにすればコミュニティがより良くなるか、また、それに対して自分がどのように貢献できるかという観点からの記述が目立った。プログラム修了後も継続して関わりを持つことを希望している学生も存在した。具体的には、「地域の人たちと意見交換をしながら街づくりに参加したい」「月1回の頻度で農作物を一緒につくりたい」「三瀬村のイベントやボランティアのスタッフとして働きたい」「地域で生産された食材や食品などを佐賀大学や佐賀市中心街で販売してみたい」などの意欲が見られた。

以上のように、参加した日本人学生が協働を通して地域の魅力と課題を発見し、どのよ

うに自らが貢献できるかを積極的に検討する姿勢がみられた。しかしながら半日という限られた時間での取り組みでは、市民性を養うことができたと評価することはできない。参加学生に「気づき」と「きっかけ」を与えたに過ぎず、地域と継続的に関わりを持たせる仕組みと活動内容の検討が必要であると考え⁸。

6 三瀬村住民が学生との協働から得たものと課題

地域住民が学生との協働活動を通して何を得たのかについて、2014年度のプログラム修了後に集落支援員の堀智子氏が行なった聞き取りと2015年度のプログラム終了後に実施したアンケート調査の結果をもとに考察する。

2014年度サマープログラム終了後に堀氏がまとめた報告書には、地域の得た成果として(1)普段しづらい作業を処理できた(2)外部と交流し地域の現状(人材や資源)を再認識した(3)地域力を高めるきっかけにするという3点が挙げられている(堀2014)。この3つのうちの(2)について、堀氏が聞き書きした鳴瀬川流域の住民の感想を以下に抜粋し紹介したい。

[学生(留学生を含む)との関わりを通しての感想]

- ・若い人が来ると活気が出る。楽しくて元気をもらえた。
- ・地元にとって良い刺激になった。
- ・積極的に素直な学生さんが多かった。
- ・若い人たちと交流する機会が少ないので楽しかった。
- ・地域にとって良い経験になった。
- ・学生の頑張る姿に刺激を受けた。
- ・熱心に働き、人の話を聴いてくれたのが嬉しかった。
- ・最後に握手や挨拶をして別れたが、感動した。
- ・学生をお客さん扱いせず、皆で作業ができて良かった。
- ・ゲートボールも一緒に楽しめたと、ソフトバレーもできた。
- ・参加する前は不安で、少し気が重かったが、参加してみたらとても楽しかった。

[留学生との関わりを通しての感想]

- ・言葉は通じなくても、意欲が感じられた。
- ・通訳ができる学生がいて助かった。
- ・世界に数多い人の中で、今日皆さんに出会えたことに感謝。幸せを感じている。

⁸ 2015年度から筆者が担当するインターフェイス科目「異文化交流Ⅳ－野外手法を通じた地域社会の価値の再検討」では、この点を改善するために、履修学生は3日間の三瀬村での協働活動とフィールドワークと、2日間の三瀬村についての発信活動を大学祭期間中に行なった。

- ・今まで知らなかった地域のことを今回知ることができて、ためになった。地域についての新発見があった。
- ・今回の交流で少し外国の方を身近に感じることができた。
- ・違う国の方との交流で、その国の見方が変わった。
- ・海外の方や若い方と触れ合えて楽しかった。良い刺激になるし、また機会があれば取り組みたい。

【出所】堀智子（2014）『佐賀大学×鳴瀬川4集落 サマープログラム（農村体験・支援・交流）』

以上の地域住民の声から発露されるものは、現在、村の中ではあまり見なくなった20代の若者との交流が「刺激」となっているということである。特に単なる若者との交流会では見ることができない光景、つまり若者が熱心に働く姿を見て喜びを感じた人々も多い。従って、大学（学生）が提供できる「サービス」とは単に労力だけではなく、地域社会に興味・関心を持つ若者が地域に入り、意見交換をすることも大きな貢献になりうると思われる。また、日本語の不自由な海外からの留学生との触れ合いも、住民にとっては知らない世界を知る機会であり、刺激の多い体験となっている。言語障壁があっても、積極的に非言語コミュニケーションを行なうことで両者が「解り合えた」という経験は、留学生のみならず、地域住民にとっても貴重なものであったと言える。

次に、大学や学生との協働活動をする上で、何が課題として認識されているかについて、2014年度の聞き取りと2015年のアンケート調査⁹の結果から考察する。上でも述べた通り、多くの賛同者・協力者を集落内に呼びかけ、参加者を集めることが最も大きな課題ではないかと考える。2015年に行なったアンケートでは、活動に参加をした理由として回答者16人中7人は「興味があったから」であったが、5人は「自治会の世話役」だから、4人は「頼まれたから」という結果が出ており、主体的・積極的な参加が困難なことがわかる。地域からの参加者に関して、「継続性を考えると自治会役員だけでなく、他の協力者が必要になる」、「色々な世代の人が参加できると良い」ので、「参加してもらいやすい内容」、「地域の人々をどう巻き込むか、内容、時期、案内の仕方」などを検討した方が良い、「子育て世代や農家の参加が難しいので日程を検討してはどうか」などの意見が出された。

次に活動内容に対して、改善・改良するための提案が参加者から積極的に提示されている。第一に、学生の意見を聞く時間をつくりたい、地域の問題点を学生と話をして協力してもらいたいという要望があった。具体的には「若者の出入りを多くする知恵」「どういふ催しであれば、山間部の行事に参加しても良いと若者は思うのか」をじっくり聞きたいという意見が記述されている。3点目は、活動時間を増やすという提案である。一度きりの短時間の活動では学生に深い体験はさせにくいため、同じ学生と繰り返し活動や交流が

⁹ 4地区全体での参加者数は概算で約40人であった。アンケート用紙は参加者全員に配布することができなかったが、16人の方々にご協力をいただくことができた。2015年8月実施。

できれば良いとの指摘があった。

7. おわりに

サマープログラムの一環として行なった過去3回の三瀬村での活動に焦点をあてて整理をした。留学生も日本人学生も地域住民との協働と交流から多くの学びを獲得している。しかしながら、現時点では、まだ学生の学習評価を十分に測定できているとは言えない。サービス・ラーニングから得られる学生の学びの質や中身については、今後、評価方法を検討しながら精査していきたい。また、地域社会への貢献という点についても多くの課題が存在し、今後も引き続き、地域住民や集落支援員との対話を繰り返しながら、双方の成果が最大限になるアプローチを模索したいと考えている。地域住民からは、地域が抱える様々な課題の解決に、学生が貢献してくれることを期待する声を聞く。課外活動として学生らが自主的に地域社会へ出て行くようになるためにも、学生に地域に関して学習する機会を教養教育の中で多く提供し、課題解決に貢献したいという意欲をもたせるサービス・ラーニングの授業を展開することは意義があると思われる。

人の流動性が低く、モノカルチャーな中山間地域の人々が、他者との出会いや対話の機会を持つことは、時間はかかるかもしれないが、コミュニティに変化を促すあるいは変化そのものを発生させる可能性を与える。留学生という言葉も文化的背景も異なる異質な他者と、日本人学生というこれまた価値観や文化の異なる若者との接触がもたらす地域への影響についても、今後、考察していきたい。

謝 辞

本教育実践は、三瀬村鳴瀬川流域4地区の自治会および住民の皆様、佐賀市集落支援員の掘智子氏に多大なるご尽力・ご協力をいただき実施することができた。また三瀬村での活動に協力していただいた学内関係者にも、この場を借りて感謝の意を表したい。本稿に関連して実施した活動の一部は、2014年度および2015年度の「地域志向教育研究費」（地（知）の拠点整備事業：コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト）の支援を受けて実施したことを記す。

引用・参考文献

- (1) 五十嵐勉「たそがれの時代 さが幸福の肖像 私の視点」佐賀新聞 2014年6月28日, p. 5.
- (2) 佐賀市人口統計『市の人口』平成19年～平成27年。 <https://www.city.saga.lg.jp/main/288.html>
- (3) 『佐賀市高齢者健康福祉計画』佐賀中部広域連合
<http://www.chubu.saga.saga.jp/2%20jigyoukeikaku/第3章.pdf>
- (4) 桜井政成「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」：サービス・ラーニングの全学的展開を目指して『立命館高等教育研究』7号, PP. 21-40 (2007).
- (5) 中村知子・藤原由美・三浦智恵子「サービ斯拉ーニング授業の開発」『自由が丘産能大学紀要』第43号. pp. 15-28 (2010).
- (6) 日本学術会議『提言 21世紀の教養と教養教育』2010年4月5日.
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf>
- (7) 堀智子『佐賀大学×鳴瀬川4集落 サマープログラム（農村体験・支援・交流）』4集落合同反省会配布資料, 2014年8月9日.
- (8) 藤田英典「大学改革を問い直す」第三回グローバル化時代の人材育成『大学新聞』 2014年10月11日 <http://daigakushinbun.com/post/views/770>
- (9) 村上むつこ「地域貢献を学習に“サービ斯拉ーニング”の試み-1-」『教育学術オンライン』第2258号、2007年1月10日, https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2258/3_4.html
- (10) 山脇直司『グローバル公共哲学―「活私開公」のヴィジョンのために』東京大学出版会 (2008).